（書式２）

＜事務局使用欄＞受付番号：　　－

「２０２２年度国立台湾大学スプリングスクール派遣参加報告書」

京都大学法学部１年　石原麟太郎

独学で学んできた中国語をアウトプットする機会を求めて留学に応募したが、語学以外の面でも貴重な成果が得られた。中でも最も印象に残っている経験は、プログラムの自由時間を活用して政党の党首を訪問したことである。同窓会との交流会をきっかけに連絡先を交換した京大ＯＢの方が偶然政党の幹事長を務めており、僕が台湾の政治と選挙に関心があることを知って、党首の曽さんと引き合わせてくださったのである。曽さんは、政治学研究の道を志してはいるが未だ何者でもない学部一回生の僕に対して、大変親切に応対してくださった。選挙活動の模様や現在の台湾政治の問題点などに関して、これまで疑問に感じていたことを直接伺うことができた。さらに、留学中に街中で見かけた、政治に関連する事物や出来事に関しても、興味深い説明や意見をいただいた。

この経験を通して、主体的・積極的に行動することの重要性を痛感させられた。もちろんプログラムは非常に洗練されており、文化体験や講義を通して、麻雀から社会問題に至るまで台湾の文化・社会を余すところなく伝えてくれる。ただ参加するだけでも、充分に台湾の魅力を堪能できるだろう。しかし、プログラムの枠外でも貪欲に、積極的に行動してはじめて、得られる学びや体験があるのだ。

滞在期間が 20 日程度と限られている台湾では、機会を逃してしまえば二度と経験できないようなことが多い。だからこそ、積極的にならざるを得ない。しかし日本ではどうだろう。学部の 4 年間は有限であるにも拘らず、無限に時間があるかのように錯覚し、目の前の機会を活かそうとしない。そうしてただ漫然と通学し、インターネットを見漁っているだけでは、4 年間はあっという間に過ぎてしまうだろう。たしかに、海外に出て経験を積むことも大切だ。機会があればまた留学したいとも思っている。しかしまずは日本での日常のなかで、積極的に学びを得ようとする姿勢こそが大切だと感じた。